

やってみよう！

子どもたちは、日々の暮らしの中で、“人や自然、もの、出来事”と様々に関わり、自ら心を動かし、主体的に遊びを楽しんでいます。その姿は、乳児から捉えられることが、多くの事例に示されています。「科学する心」が育まれる姿に注目し、写真やコメントで子どもの姿を記録することは、記録した保育者が子どもの理解を深めるだけでなく、園内の保育者間や保護者との共通理解にもつながります。特に乳幼児では、言葉や動きだけではなく、視線や表情、手や指の様子などの写真からの情報があることで、言葉での表現が未熟であっても、「科学する心」が育まれる体験を読み取る大きな手がかりになります。

学校法人ろりぽっぷ学園 ろりぽっぷ保育園

1歳児

「子どもの姿を写真とコメントで可視化して理解する」取り組み

「子どもの心に寄り添う保育」を大切に、大人が「どういう子どもに育てたいか」ではなく、子ども一人一人が「どう育とうとしているのか」を捉え、子どもの声に耳を傾け、子どもと同じ目線に立ち、一緒に遊びを作り上げていく保育を目指している。そのために、0歳児から5歳児まで一人一人の成長を見守りながら、毎日の遊びの中にある学びの姿を捉えられるよう、保育者としての視点を磨いてきた。

こうして、保育者が捉えた子どもの育ちを保育者間で共有するだけでなく、保護者にも広げ、より多くの目で子どもの成長を見守る工夫をしている。その策の一つとして、子どもをよく観察し、学びや体験を可視化して理解することを目的に、写真やコメントで表した記録作りに園全体で取り組んでいる。

場面 1. 「積めるかな？」

<8月21日>

保育者の視点、見守り

積み木遊びから他の物を積み上げる遊びへと発展！
「鍋だどうなるかな？」と自ら試したり、順番を変えて乗せてみたり…夢中になって取り組んでいる。

Aさんの姿に刺激を受けたBさんも積み重ねて遊んでいる！崩れる音やユラユラ揺れることに面白さを感じている。

保育者間の協議

Aさんが食器を積み重ね、揺れること、崩れる音の面白さに気づき、繰り返し試している。

この姿を受け、翌日の水遊びの際には、カップだけでなく、同じようなボウルやペットボトル、様々な大きさのカップを準備しようと話し合う。

様々な素材と「水」に関わる遊びの中で、水のはじける音、流れ方の違い、当たるものによって響く音が違うことなど、多様な面白さや不思議さを体験できるように環境を準備し、実践する。

なべやフライパンを重ねはじめて

つみきで遊んでいたAちゃん。言葉よりも高く積み上げる姿を見て、保育者が「すごいね〜！」と声をかけていると、ままごとコーナーへ移動するAちゃん。

ままごとで「ぽんぽん」と木算子を見ていると...

どきたん!!

何度も「フレンド」すると...

小真重に小真重に、重ねます

よいよ、よいよ。

あれ？あれ？

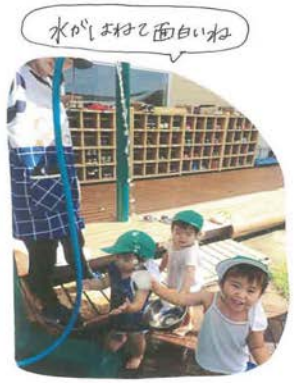
こんなに高く重ねる事ができた姿に「すごいね、ビックリしてしまいました。」

Aちゃんの姿をじーっと見ているBちゃんも、木算子を重ねます。「すごいね〜、すごいね」と声をかけてみると、重ねられた事が面白くなって、「あれ？あれ？」と喜んでいる。大笑いして身乗り返す、Bちゃんどきた!

8/21(水)

場面 2. 「雨だ」

<8月22日>



ホースをい使の上から水を落としてみると、「雨だ」とCちゃん。コップで水をくんどみたり、水を手でつかまうとしたり、興味あつたりする子どもたち。

Bちゃんも「ボウルで水をくんどみました。すると、水がボウルに当たると「ボンボン」と音があつたりしました。」

音があつることに気づいたBちゃん。面白くて何度も繰り返して楽しんでいます。



水遊びの時にシャワーのようにホースで水をかける保育者の姿を見て、「コップで砂をすいて、「シャワーみたい」と言いながら砂をサラサラ落とすCちゃん。」

タライの水の中に砂を沢山入れてスコップで混ぜ混ぜするCちゃんとAちゃん。

今日もまた楽しい水遊びや面白さを感じた子どもたちでした。



保育者の視点、見守り
水のはじける音に気づいた！ボウル、カップなど当たるものによって音の違いに気づいたり、水が跳ねる面白さを感じたりして、次々に試している。
水から砂に変えて、保育者の模倣をしてシャワー遊びを楽しんでいる。
素材は違うが、雫が落ちることや状況と、砂が流れ落ちることや状況に興味をもってものの原理を感じ取り、知っていく場面だ。

保護者からの声
「家で米研ぎをしていると、じっと見ている子どもの姿があったため、洗う前の米と洗った後の米をそれぞれ触られるようにしました。すると、サラサラの米の感触と、洗ってしっとりした米の感触の違いを楽しむ様子がありました」

保育者の読み取り
身近な生活の中にも子どもたちの「面白そう！」「やってみよう！」「やってみよう！」が存在すること、その好奇心や興味・関心が一人一人の「科学する心」の育ちにつながっていることを感じた。

保育者間の共有

【子どもたちの育ち】 保育者間で協議をし環境に加えた様々な素材により好奇心を広げる子どもたちは、「面白そう」「やってみよう」と自分なりに繰り返し、夢中になって遊ぶ中で感性が育まれ、新たな気づきをしている。子どもたちが夢中になるような環境の工夫を大切にすることで、水遊びはより豊かな気づきの体験につながった。

【保育者の成果】 他の保育者が捉えた学びの視点を共有することで、保育者一人一人の子どもを見る視点を深め合うことができる。一人一人の記録ファイルを、送迎時などの保護者との面談にも活かすことで、子どもの育ちの道筋や成長の姿を保護者とも共有できる。

【考察】 保育者は、子どもをよく観察し、学びや体験が見取れるように写真やコメントで可視化したり、保育者間で共有したりすることで、子どもを見る視点が明確になった。繰り返し興味の対象に関わる子どもの好奇心や感性を捉えて、子どもに寄り添う保育をすることで、子どもたちは夢中になって遊びを楽しむようになり、自分なりに考えようとする力や創造力が育まれていく。また、興味の対象に関わり、「気づく面白さ」に加え、砂や水、音などの違いに不思議や疑問などの「なぜ」が生まれる子どもは、自分なりに納得できた喜びを味わい、「科学する心」が育まれる体験を重ねている。日々のクラス全体の記録だけではなく、一人一人の姿を追った記録を園と家庭で共有することで、保護者からの情報により、家庭での姿も共有することにつながり、子どもの理解がより深まる。